桜の木の下で

道長僥倖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
桜の木の下で

【Ｎコード】
Ｎ１８０４Ｓ

【作者名】
道長僥倖

【あらすじ】
歳下なんて考えられなかった千年と妙に大人っぽいところがあるが女心が分からない健康。お互いの気持ちが近づく今、二人は何を想うのか……

（前書き）

本作品は『歳の差恋愛小説企画』の参加作品です。

突然親友がつぶやいた。
「あぁ、春だねぇ……彼氏ほしいなぁ、どっかにいないかな？」
「そんな都合よく転がってないでしょ。あんたは狙ってる男がレベルが高過ぎんのよ」
「じゃああんたは？」
そう聞かれて私はすんなりとこう答えた。
「やっぱ彼氏にするならタメか年上でしょ、うん」
「え、もしかしてそれだけ？」
「そう、たったこれだけ」

＊　＊　＊　＊　＊

ピピピピピッと何かが鳴っている。この音は毎日聞くあの音だろう。ということは……。
「うわぁ、また遅刻した！」
そう。私、渡辺千年（わたなべちとせ）は遅刻常連者である。急いで仕度をし、オレンジジュースだけ口に注ぎ込むと私は家を出た。私は家から学校まで比較的近いので徒歩通学者なのである。それが仇となっている。

桜並木を抜けるとすぐ学校だ。急いで行こうと走っていたが、ふと視界のなかに人が入ってきた。普段なら気にせず通り過ぎてしまうのに何故だか今日は立ち止まってしまった。そこには風に揺られて舞う桜をじっと見上げている少年がいた。見つめる瞳が少年と感じさせないくらい大人っぽく、どこか儚（はかな）しげに見える。しばらく見つめていると、少年が私に気づいたようでこちらに視線を向けた。慌てて目を逸らしたが、少年が声をかけてきた。
「何ですか？」

私は必死に理由を考え
「あ、あの桜に見とれてて……」
そう答えた。少年は納得したかのようにあぁ、とだけ言った。

少し気まずい空気になり、無言で去ろうにもどうしたものかと考えていたら、突然少年がつぶやいた。
「桜って散ってるときが一番綺麗だよな」
それは私に言っているのだろうか、それとも単なる独り言なのか分からなかったが私はそれに答えるように呟いた。
「そうね。満開に咲いてる姿も綺麗だけど、やっぱり散っている時が一番ね。でも雨の日とか地面見ると汚いけどね」
「ひどいなぁ、普通こういう雰囲気で言うか？」
初めて私の方へ体を向けてそう言い放った。そこで私は気づいた。
「その制服って。もしかして宮町中学の子なの？」
「え…そうだけど。なんで？」
「懐かしいなぁ、と思ったの。私、卒業生だから」
「そうなんだ。へぇ～偶然だね」
そう言って、ニタッと笑う笑顔がとても可愛い。
その瞬間強く風が吹き、さっきまで走っていたせいか、解けていたマフラーが風に舞って少年の目の前の木の枝に引っかかった。それを小さな姿で必死に背伸びをしてマフラーを取ってくれようとしている少年を見て、思わず微笑んでしまった。
まったく、大人なんだか、子供なんだか……。

やっとの思いで取って私の元へ持って来てくれた少年は
「何、その顔」
と、少し照れたように顔を赤く染め、不貞腐れた。
「いや、何でも。マフラーはもう必要ないわね、春なんだから」
「ああ、そうさ。はいコレ」
ありがとうと受け取ったその手には、枝が当たって出来た傷があっ

た。
「血が出てる。絆創膏貼るから、手を貸して」
そう言って私はカバンの中から絆創膏を出した。
「あ、ありがと。このくらい大丈夫なんだけどなぁ……」
「マフラーのお礼だと思って、少年君」
絆創膏の貼られた自分の手を見ながら彼は言った。
「少年君じゃないよ、中一だけどさ。俺の名前は久保健康（くぼたけやす）。あんたは？」
「私は渡辺千年、高三よ。よろしくね」
――これが健康との最初の出会いだった。

＊　＊　＊　＊　＊

学校に着いた時には十時を過ぎようとしていた。今は二限目。今日に限って二限は担任の中原、最悪だ……。恐る恐る教室の後ろの扉を少し開け、しゃがんで入り込んだ。私の席は一番後ろなのでこういう時は便利だ。後ろの方の席に座るクラスメイトは、ちらちらと気づいたが静かにしていてくれた。中原が黒板へ向いたのでそっと席に向かおうとしたその時
「渡辺、気づいていないと思ったか？」
その瞬間、全員が振り向いて私を見た。中原先生を除いて。黒板に字を書き終えた中原は溜め息をつきながら私を見て言った。
「お前という奴は、新学期が始まって一週間だというのに毎日遅刻しとるぞ。まったく、まともに登校できる日はないのか？」
「えっと、あの、その、怪我した少年を手当てしてました」
「それ、一昨日も言ってたぞ。下手な嘘つく前にさっさと席に着け」
しまった、何て事をしてくれるのよ、一昨日の私！　せっかく本当のことだったのに信じてもらえなかった。
所謂（いわゆる）、自業自得というやつだ。今更何を言っても無駄なのだが。おかげでクラスは笑いに包まれ楽しい楽しい授業になったので良しと

しよう。

それからも偶(たま)に遅刻しては彼と出会い、楽しく話というのが1ヶ月ほど続き、彼も学校は良いのか？　という疑問はあったが、なんとなく聞かずにいた。健康と過ごす時間はとても安らぎ、心が落ち着く。この時間を失いたくない、そう思い始めていた。

＊　＊　＊　＊　＊

いつもどおり今日も遅刻し健康と話していたが、今日は何だか健康の様子がおかしい。ずっとぼうっとしている感じだ。するとあまり口を開かなかった健康が言った。

「ごめん。今日さ、もう行くから」

「う、うん。分かった」

私がそう返事をした時、健康が視界から消えて地面に倒れ込んだ。

「健康、大丈夫？　しっかりして！！」

その後健康は救急車に運ばれ、病院まで私は付き添ったが原因が分からないまま帰らされた。

そして次の日、その次の日健康はいつもの場所にいなかった。

「どうしたの？」

昼休み、大好物の焼きそばパンを食べていると唐突に親友が聞いてきた。

「いや、何でも無いけど」

「もしかして、よく言ってる少年ってのに関係あったりして」

その言葉に私は思わずピクッと反応してしまった。

「図星ね。その男の子が好きなの？」

「そ、そんなこと……」

「好きなんだ。結構年下なの？」

「それは……」
「ホントに少年なんだ」
健康のことばかり考えて仕方がない。とても心配で落ち着いてられない気持ちもあるけどそれがイコール〝好き〟なのか分からない。友達としては好きだと言える。でもそういう風に考えてるのかは……。もしそうだとしても認めたくはない。年下なんて考えられないのが本心だ。
考え込んで言葉を返さない私を見て親友は続けた。
「まぁ、良く分かんないけど素直にならなきゃだめだよ。自分の気持ちはそう簡単には変わってくれないものだから。千年の考えた答えならどんな結果でも私は応援するからね」
そう言ってくれて少しだけ気が楽になった。まだ分からないけど、とりあえずそれと健康の身を案じることは別だ。
「ありがとう」
親友にそう告げた。

＊　＊　＊　＊　＊

学校が終わり私は健康が運ばれた病院に行ってみた。受付で名前を言ったら病室の場所を教えてくれた。つまり入院したままなのだ。やっぱり何かあったということだ。
「健康……」
病室の扉を開けて健康のベッドの隣に行った。
「千年！　わざわざ来てくれたのか」
「うん、心配だったから」
「ありがとな。でも大丈夫だぞ」
「でも入院してたってことは何かあったんでしょ？」
「大丈夫だって！」
「そんなこと言ったって」
「だから大丈夫だって言ってんだろ！！」

初めて健康が本気で怒る姿を見た。心配してるのに分かってくれないからか、健康の怒ってる姿を見たせいか私は健康の袖をぎゅっと掴んで涙が頬をつたっていくのを感じた。そして俯きながら――
「お願い、私がすごく辛いの。だから本当のことを教えて。お願い」
ちゃんと声になったかは定かではない。しかし健康は窓の外を見ながら
「屋上へ行こう。すべて話すよ」
そう言って袖を掴んでいた私の手を握った。

「春休みが終わる少し前だった。前からちょっとおかしいと思ってた脳の検査の結果が出たのは……。脳に腫瘍があるんだって。だから手術しなきゃいけない。でも今回の入院は検査だけだから、明日一時退院して今度の入院で手術する。だけどぜってー治すから安心しろよな！」
そう笑って健康は言った。笑って言えるようなことじゃないだろう。私自身、聞いていてこちらがどうかしてしまいそうなのに。安心できるわけないし大丈夫なはずがない。でも健康が笑ってそう言うと私は信じることができた。
――きっとこの時からお互いに想いを寄せていたんだと思う。

＊　＊　＊　＊　＊

それから三日後の朝、今は青々と茂る桜の下で健康がソレを告げた。
「俺、千年の事が好きだ」
私はなんて言うべきか迷っていたが一言しか出なかった。
「ごめん」
「どうして、何でだよ。千年は俺の事嫌い？」
必死な顔をして私を見上げている。その姿を見ると心が痛い。
「好きだよ。でもそういう意味で好きなのか分かんないの、だからごめん」

「そっか、来週手術だからじゃあね。バイバイ」
そう言って健康は去って行った。きっと凄く勇気を出して告げたんだろう。なのに私はそれを……最低だ。

その後しばらく私は泣き崩れた。自分からフッておきながらこんなに後悔するとは思ってもいなかった。日が沈み、明くる朝が来ても涙が止まらない。しばらく自分の部屋に閉じこもり、考え続けた。

――もうこの涙が健康を本気で好きだという証拠でしかない。躊躇(ためら)っている暇は無い。もうすぐ手術の日が来る。私は走って病院に行き、健康を探した。しかし、どれだけ探しても見つからない。まだ入院していなかったのだろうか。その時ふと事実を話してくれた屋上が浮かびそこへ向かった。扉をあけると真っ青な空を見上げている彼がいた。
「健康、ごめんね！！！！」
荒げた声ではぁはぁと息をつきながら言った。
「千年……俺、またフられたの！？」
「あ、いや、そうじゃなくて……。年下とか考えられないって意地はってたの。本当は違うのに嘘ついて健康を傷つけた。そ、それに心配だったの。本気で好きなんじゃなくて遊びなんじゃないかって。だから凄く怖かった」
「馬鹿だなぁ、俺が本気でそんなこと思うわけないじゃん。だろ？」
「う、うん」
「千年こそどうなんだよ？」
え、何が？　と聞く前に健康が続けた。
「俺の頭の手術が必ずしも成功するとは限らない。もしかしたら……」
その後に続くモノは言葉にならなかった。
しかし、何を言おうとしたか分かる。とても考えたくは無いこと―

―。
「それでも……それでも俺を愛せますか？」
驚いた。まさか中学生から愛という言葉が出てくるとは思わなかった。私なら好きとは言えても、愛とは恥ずかしくてなかなか言えない。けれども……
　あぁ、この眼だ――。
初めて会った時と同じ、この真っすぐに私を見つめる曇りの無い真っ黒な瞳。この純真な瞳の前でなら素直に言える。
「あ、愛してあげても良いけど？」
ちょっ、何を言ってるの私！
「ち～と～せぇ～、それ本気で言ってんの？」
と言う健康が本気にしてる。こういう時の素直さを本当に見習わなくては……
「そんなわけないじゃん、馬鹿。……好きだよ。あ、愛してる。」
「うん。大好きだ、千年！！」

　歳の差があれば、それだけ不安は大きい。これからだっていろんな不安が生まれるかもしれない。けれどもこのままの真っすぐな健康とならきっとどんなことだって乗り越えられる。必ず次の春もあの桜を一緒に見ることが出来る。ずっ(千年)と一緒に――――

（後書き）

最後まで読んで下さった読者様、本当にありがとうございます。

今回はキャラの名前で遊んでしまいました。病気なのに健康…ごめんなタケ（T＿T）

私自身が桜が大好きなので今回登場させてみました。

ですが雨の日の地面同様、どうしても苦手なのは花が落ちきって葉が出てきた頃の防虫剤を撒いていない木です。

防虫剤を撒いていない木って凄く毛虫がいますよね。

中学時代、それで大変な思いをしました。

皆さん、毛虫には気をつけましょう。

それでは…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1804s/

桜の木の下で

2011年4月4日20時08分発行